

第7回シェイクスピア・ワークショップ報告

諏訪 暁（ヨーク大学大学院修士課程）

10月13、14日に秋田大学で開催された日本シェイクスピア協会大会の2日目に、シェイクスピア・ワークショップが行われました。メンバーは、聖心女子大学大学院博士後期課程の渡邊晶子さん、成城大学博士前期課程の滝口沙音里さん、早稲田大学大学院修士課程の黒部敬さん、ヨーク大学大学院修士課程の諏訪暁でした。ワークショップ前からメールを通して自己紹介、意見交換をしたのち、発表に臨みました。

渡邊さんは「Vicious Ferneze, Vicious Antonio: A Pragmatic Analysis of *The Jew of Malta* and *The Merchant of Venice*」というタイトルで、『ヴェニスの商人』のアントーニオと『ヴェニスの商人』の種本の1つである『マルタ島のユダヤ人』のフェルネーゼのそれぞれの台詞の類似点を紹介することで、従来の「善人」としてのアントーニオ像とは異なった視点を提供しました。

滝口さんの発表「Modern adapted Shakespeare's playsにおける舞台設定についての考察：PropellerとRoyal Shakespeare Companyによる*The Merchant of Venice*」は、PropellerとRSCという2つの劇団による近年の『ヴェニスの商人』の公演を取り上げ、女性キャラクターの服装や話し方などに見られる設定の変更によって観客の中に生じる「違和感」について、それがどのような形で「笑いどころ」として消化されていくのか考察しました。

黒部さんの『表象の揺らぎ』と『ジュリアス・シーザー』では、キャシアスがブルータスを説得する場面でキャシアスがどのようにして「シーザー」、「ブルータス」という言葉の意味を曖昧にし、それぞれの表象に「揺らぎ」を与えているのかを検証しました。

諏訪は「シェイクスピア作品における役者と観客の関係性：エイドリアン・ノーブルの『夏の夜の夢』」というタイトルで、映画化された『夏の夜の夢』において役者と観客の関係はどのように表現されているか、またそれは劇場での公演とどのように異なるのかを発表しました。

それぞれ研究対象とする分野が異なっていたため、シェイクスピア研究の広範さに改めて驚きながらも、メールでの意見交換の段階からお互い興味深い意見を出し合えたように思います。ただ、最初はどのような質問をしていいのか分からず、意見交換が始まるまでに時間が空いてしまっていました。また、意見交換の頻度が決して活発とは表現できないものであったことも悔やまれます。不安を抱えながらワークショップ当日を迎えましたが、コメンテーターの荒木正純先生、境野直樹先生の厳しくもあたたかいコメントをいただき、自分たちの研究を見直す良い機会になったと思います。ワークショップ担当委員の佐野隆弥先生、冬木ひろみ先生には、このような今後の研究の刺激となるような機会を提供していただきました。先生方にはこの場で改めて感謝の意を表したいと思います。司会の自分を中心としてメールでの意見交換の段階からより主体的にこのワークショップに取り組めていれば良かったなど、反省点は尽きませんが、今後は今回のワークショップで学んだことを活かし、それぞれの研究に精進したいと考えております。